

近代気象学の父

この人物の偉業は、下記の電報の最後の一文によって人々に知られるようになった。

「敵艦隊見ユトノ警報ニ接シ聯(連)合艦隊ハ直チニ出動、之ヲ撃滅セントス。本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」

日露戦争最中の明治38年(1905)5月、ロシアのバルチック艦隊との決戦に臨み、連合艦隊の東郷平八郎指令長官が大本営宛に送った電文である。最後の「天気晴朗なれども…」が名文で有名となった。

この一文について司馬遼太郎は、長編歴史小説『坂の上の雲』で次のように述べている。「じつをいうと、この文章は、東京の気象官が、大本営を経て毎朝とどけてくる天気予報の文章だったのである」と。

この予報を送った人物が、中央气象台(現気象庁)技師で予報課長兼臨時観測課長の岡田武松(1874-1956)である。若干32歳。海戦海域の天気予報を岡田はこう判断した。

『岡田武松伝』はその時の様子をこう綴る。

「過去のすべての経験や学理を反芻するように暫く瞑目した後、戦場と推定される海域の明日の予報を一気に書き下ろした。“天気晴朗なるも浪高かるべし”」

岡田は後年、「あの時の予報は自分がやり、ピシヤリと当たった」(『岡田武松伝』)と振り返っていたという。学究生活から明治32年(1899)、中央气象台(同)に就職して6年目のことだった。

岡田は明治7年(1874)、千葉県布佐村(現我孫子市)に父由之助、母ひさの次男として生まれた。生家の目の前を利根川が流れている。対岸は布川(茨城県利根町)である。

岡田は、地元の刀寧小学校(現布佐小学校)を卒業後、東京府立第一中学校(現都立日比谷高校)、第一高等学校、さらに東京帝国大学(現東京大学)理科大学を卒業した。

明治43年(1910)、日本独特の梅雨を解説した『梅雨論』を発表。これが評価されて理学博士となった。大正9年(1920)に海洋

岡田武松

Okada Takematsu

气象台(現神戸海洋气象台)が設置されると、初代台長に就いた。

さらに大正12年(1923)には、第4代中央气象台長(現気象庁長官)に就任。この間、世界に先駆けた海上船舶の無線通信や地震観測網の整備、気象観測船の新造、気象技術者の養成所創設などに尽力した。

昭和16年(1941)、68歳となった岡田は、中央气象台長の職を依願退職。故郷の布佐に居住する。同年12月の日米開戦直前の7月のことであった。

戦後の昭和24年(1949)、気象に関するこれまでの功績が認められて「文化勲章」を受賞。その後も気象に関する講義活動を続けていたが、昭和31年(1956)、病に倒れ、世を去った。83歳だった。

岡田は、毎年のように日本を襲う「台風」の名付け親だ。気象現象は私たちの生活に大きな影響を与えている。異常気象が続く中、岡田が残した遺産の顕彰とその継承が、

今こそ強く求められている(文中敬称略)。

主な参考文献

『岡田武松伝』(須田瀧雄著、昭和43年、岩波書店発行)。『ふるさと我孫子の先人たち』(平成24年、我孫子市教育委員会発行)。『秋山真之』(田中宏巳著、平成16年、吉川弘文館発行)など。



旧岡田邸の一部が残る「近隣センターぶさの風」
=我孫子市布佐

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「先覚者」のヒント